



Title	座談会 日本の中国思想研究者が国際舞台に出るために：「出土資料と先秦思想」青年学者国際シンポジウムに参加して
Author(s)	
Citation	中国研究集刊. 2005, 39, p. 108-134
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61145
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

座談会 日本の中国思想研究者が国際舞台に出るために

——「出土資料と先秦思想」 青年学者国際シンポジウムに参加して——

参加者

司会：佐藤将之（オランダ・ライデン大学博士・台湾大

学哲学系助教授）

討論者：佐野大介（大阪大学博士・奈良大学非常勤講師）

井上了（大阪大学懷徳堂センター・京都産業大

学非常勤講師）

前川正名（大阪大学博士・京都産業大学非常勤講

師）

福田一也（東北大学博士・北京清華大学高級進修

生）

上野洋子（大阪大学文学部博士課程）

記録・整理：安井伸介（台湾大学政治学系博士課程）

日時：二〇〇五年三月二八日午後五時～七時三〇分

場所：台湾大学哲学系館二〇一号セミナー室

司会：それでは、座談会を始めたいと思います。今回こ

の座談会の参加者である大阪大学と東北大学大学院の卒業生ならびに院生の方々は、三月二五日・二六日に行われた「出土新資料と中国思想の再構築」国際シンポジウムと三月二七日・二八日（座談会当日）に行われた「出土新資料と先秦思想」青年学者国際シンポジウムの二つのシンポジウムに参加されているわけですが、特に後者については、ここにいる皆様も発表者として参加なさっています。私自身、この青年学者シンポジウムをオーガナイズした動機とプロセスについては、恐らくこの座談会の記事と一緒に載せられる予定の私の文章の中で詳述したところではありますが、重要な一、二点についてはやはり最初にここで説明しておきたいと思います。

中国思想研究者の国際進出のための ノウハウ作りの必要

司会：私自身の考えにおいて国際時代の学術のあり方というのは、自分が持っているビジョンとかオリジナリティーとかを自分の母国語でない言語に翻訳して外国の学会において発表したり、また外国語のジャーナルに発表したりすることにより、そこからの反応を自分の研究に再びフィードバックさせて、国際的な学術活動の中に自分の研究をコンテクスチュアライズし、自らの業績を国際的に位置づけていくという過程の積み重ねだと思っています。しかし、問題は、こうしたプロセスが必要だと認識されているのにもかかわらず、これからそうしようとしている人たちに、それなら一体どのようなにしたらそのような活動が出来るようになるのか、その具体的な方法は何か、また、その能力獲得を目標とした努力の中で、その時その時のステップで具体的にどのような努力をしなければいけないのか、というノウハウが利用可能な形で全く提供されてこなかったことだったと思います。それと対照的に、日本では巷を見ると語学や留学やらのガイドブックが氾濫している状況ですが、

例えば日本で基本的な学術の訓練を受けた若手が、日本を出て国際的に学術活動を推進するために必要な知識やノウハウ——中国語で論文を書く、それを直す、発表する、また日本人以外の学者との付き合いの仕方、例えば名刺の作り方なども——の習得へのガイド作りが、今までなおざりにされてきたのではないのかと私は考えています。ですから、今回の青年学者シンポジウムをオーガナイズした動機に関しては、参加者の皆さんの学術的成果の場を作る、また外国語で発表することによって皆さんの国際化に資するということはもちろんありますが、それを後に続く人たちにも利用される形で残さないといけないのだと私は思うのです。そこで、私は今回の目標として、今回皆さんの発表の経験をマニュアル化し、それを見れば国際化に必要な基本的なことはいたい網羅されているというものを作りたいと望んでいます。

それからもう一点だけ付け足しさせて下さい。以上の点で賛同を得られたとして、それならそれで、こういうことは私（佐藤）がマニュアルを書いてしまえばよいものを、なぜわざわざ座談会をやったり、合同作業でこうしたものを作ったりしなければなら

ないのかという疑問が出るかもしれません。私の回答はこうです。つまり、私は日本を離れてすでに十五年以上経ちますが、その間、台湾、韓国、オランダに留学し、こうした海外滞在の経験があまりにも特殊で、こうした私の例からのマニュアルはある意味で学ぶ人にとっては余り参考にならないのではないかと思うのです。それから、私個人が十五年の経験を振りかえって作るマニュアルではなく、現在国際化途上にある皆さん自身がそれぞれ国際化へのプロセスの発展段階のある段階から思いつく考えを出してもらうことこそが、同じ段階にいる人や特にその直前の段階にいる人への切実性もより強まり、多様な背景と多様な段階に対処できるマニュアルへつながるのではないかと私は期待しているのです。

司会のくせに、かなり長い説明をしてしまつて恐縮ですが、今日の座談会で取り上げる内容は、以下の四点です。第一には、今回の活動に参加し、台湾の學術活動を目の当たりにして感じた、日本における中国思想研究国際交流の現状と問題について、率直な意見をいただきたいです。第二には、今回、皆さんが自分の論文執筆、翻訳、発表等を通じて得た作業への感想を聞かせてください。この部分は将来、

後の人にも利用可能なノウハウへのヒントが沢山入っていると思います。第三には、以上の点を踏まえ、學術活動を進めるやり方等で日本以外との差などで気づいたことを聞かせてください。現在北京にいる福田氏には中国と台湾との差などについても気づいたこと等も話していただければと思います。それから最後の第四には、今回のこのような活動の参加を踏まえた、将来への提言と自身の取り組みへの考えを、皆さん自身が持たれていると思うので、それぞれお聞かせください。以上がこの座談会の目的とアウトラインです。それでは、第一点に入りましょう。

日本における中国思想研究国際交流の現状と問題

司会：私は、学部卒業以来外国暮らしで日本の学界の状況は良く分かりません。そこでまず、福田さんから、日本では若い人が学会などで自分の発表をしていく場合のプロセスについて教えてください。

福田：自分も含めまして私の周りでは、博士課程に進んだ時期に、修士論文の一部を学会発表するというのが一般的でした。ただし、最初から日本中国学会で発表とはならず、私の場合、東北大学が中心となつて運営する東北中国学会での発表が最初でした。東

北中国学会では、一日目に著名な先生の基調講演と、現役の先生方三名ほどの研究報告があり、二日目は主に院生の発表の場となるのが通例です。当時を思い返しますと、自分の発表に汲々としており、国際化云々などは全く考えていませんでした。もちろん、外国語による発表など皆無です。その後、日本中国学会の基調講演などで始めて中国語の発表に接する機会を得ましたけれども、通訳付きなのでとくに問題はありませんでした。それから、私がよく参加したものに中国出土資料学会がありますが、そこでは多くの中国の学者も招いて報告がなされると同時に、学会報でダートマス大学における国際会議の様子などの掲載もあり、そこで始めて中国の学者とこういう交流もあるのだなどの認識は得ましたが、やはり通訳が付くので中国語修得の必要性を感じるまでには至りませんでした。ですが、危機感を覚え始めたのは、一昨年、私の先生に随行して台湾における学会に参加したときからでした。当然そこでは全部中国語で発表が進められるわけですから、中国語が聞き取れないと、会議用の論文集とにらめっこするよりほかありません。日本側の発表には通訳が付きましたが、討論の際には、互いに通訳を介するせいか、

司会

両者の話がすっかり噛み合っていないような印象を受けました。かといって、自分一人で聞き取り、討論するのも簡単なことではないでしょう。そのとき、始めて危機感のようなものを覚ええたね。私の後輩は一年半ほど中国に留学しておりましたが、国際会議において中国語で不自由なく発表し討論するというレベルには至っていなかったように思えます。日常会話と、学術的な討論は全く別であり、中国語による論文執筆も別の能力が要求されますから、何かしらそのような能力を身につける方策を見つければと思いつながら中国に留学しました。しかし、今のところまだ、聞く訓練が先決となっています。司会：中国語をどう伸ばすかということについては、またあとでふれることになると思いますが、福田さんの話からよく理解出来ることは、論文を書いて発表をするという語学レベルは、普通の会話レベルの語学力とはぜんぜん異なる水準のもので、ただ留学しただけでは到底こうしたノウハウはマスター出来ないということです。つまり、ここである程度中国語が出来るようになったことを前提とし、そこから専門の訓練を積み重ねていくことになるのだと思います。そのような訓練を効率的に行うため

にマニユアルが必要になるという、まさに私が今日訴えたいコンセプトにつながってくるわけですね。

福田：もう一つ気づいた点は、台湾では学会発表前に完成した論文の提出が求められるということです。これには驚きました。日本の場合、事前に提出するのは要旨やレジュメ程度で、論文を提出することはありません。

佐野：日本中国学会の発表募集では八百字くらいの要旨でした。それにレジュメや資料を発表当日配ったという感じですよ。

井上：日本中国学会では、発表に応募する時に提出を求められるものが八百字の要旨だけで、その要旨を見て採否を決定する。逆に言ってしまうと、八百字の要旨だけ（で審査を）通ってしまえば何でも発表できるといふシステムになっています。ですから、こちらの学会で発表すると言うのは、日本中国学会などの発表の状況と比べるとかなり大変だという印象を受けます。

司会：発表できる機会の多少についてはどうですか？

前川：私の例で言いますと、私は大東文化大学から大阪大学に行ったわけですが、一番初めの発表は、個人的なツテを頼って、國學院大学でさせていただ

きました。しかし、これは特殊な例でしょう。一般的には、他大学の人間が会員にしてもらったとして、やはり他大学のただの学生が発表させて欲しいと言っても、あまり採用されなれないと思います。最近日本中国学会は、手を上げれば発表させてくれやすくなっていますが、論文が載るかどうかというところから、可能性の方がやはり高いですから、院生にとつてはやはりツテがなければ発表の場を確保するのは困難だというのが私の考えです。

井上：個人的な感触ですが、日本中国学会や、東方学会など全国性の学会が、口頭発表はともかく、掲載論文の審査や、あと選挙や総会の運営についても、機能不全に陥っているように見受けられます。全国性のある学会について言えば、掲載基準は明らかに以前とは変わっていますね。それと対照的に、若手の側から活発に発表などがなされているのは、「某々大学中国学会」といった各大学レベルの地方学会とか、全国的なものだと「中国某々学会」といった、悪い言い方をすれば中堅や若手が勝手に作って大きくしたような学会で、そうした雑誌で刺激的な論文が沢山載っている。

司会：そのような状況で若手に発表される機会は公正に

与えられているのでしょうか。私はベテランの先生方から、『日本中国学会報』などは）依頼原稿にしないと皆院生の論文になってしまうという話を聞きました。掲載への審査等の公正さについてはどうでしょう？

井上：私は、査読の公正さについて問題があっても、各大学の雑誌での問題だったら、さして気にはしません。それが投稿の範囲を狭めてつぶれてしまってもそれはその大学の責任ですから。しかし全国性の学会のジャーナルがそうだとするとそれは由々しい問題です。

司会：投稿者を外部に開放するというのは、大学の紀要にとつては両刃の剣となりますね。なぜなら、外部に開放しなければレベルは上がらないし、かといって完全に開放すると内部の人の原稿が掲載できないなどという事態が起こりうる。台湾では、この点については最近気づいたことなのですけれども、台湾大学哲学系が出している『哲学論評』も、十年前は内部のスタッフか客員教授しか投稿出来なかったんです。しかし、現在は『哲学論評』もそうですが、台湾全体の趨勢として、投稿を外部に広く求め、自分のジャーナルのレベルを上げるべく、ジャーナル

間でかなりの競争になっています。ただ、哲学の各分野の専門家は数が限られていますから、審査になるとかなり狭い人間関係の中でやらなければいけないという状況で、そこに公正さを守る難しさがあるかもしれません。

上野：学会発表や投稿についてですが、私は、修士論文の一部を昨年の道教学会で発表しました。その背景として、博士課程に入ってから、道教学会に入会したことがあります。理事会の方が、そういう新しい人が入ってきたのなら、発表させてみてはどうかということでした。新入会の人間に発表の機会を与えてくれたということは、事実として言えると思います。なので、その機会が狭められているとは思えません。また、道教学会にのみ当てはまることかもしれないのですけれども、発表後、雑誌の編集委員の方より投稿してみようとお話がありまして、学生の私にとつては、大変ありがたいことだと思いました。私の例もそうですが、その雑誌に掲載されている論文の著者を見ると、若手の方が増えているなどという印象を受けます。また、学会の結束も強く、研究活動も活発で、お話を聞くと、今度は国際宗教史学会で発表する、しかも英語で、という若手の方も

いらっしやいました。道教という特殊な分野ではありますが、活発な国際学術交流というものを垣間見た気がします。

司会：道教は、実は国際交流がかなり進んでいる分野の一つで、私のライデン大学の指導教授であったクリストフ・スキッパ―教授の専門も道教でした。日本ではフランス語読みのシペール教授で通っているみたいですが。フランスの道教研究は、マスペロ以来、日本の研究者もかなり関心を持ち、交流をしてみましたね。

佐野：前の発言を聴いていると、日本では院生が発表出来ないという様なことなのですが、私の印象はそれとはちよつと違います。いろいろな学会の先生に話をうかがつても、投稿（発表の応募）がいっぱいあつて困っているというような話はあまり聞きません。投稿が少なく困っているという話はよく聞きますけれども。

司会：日本中国学会に関して、私が聞いた状況もそうです。

佐野：私は、院生の時に周りから発表しなさいとしきりに勧められ、むしろ私の方から「ネタがないので次にさせてください」と断っていたことが多かったく

らいです。我々学生側がそう言っていたから結果として載っていないというのが事実に近いと感じます。だとすれば、それは自分（学生側）の責任であつて、相手（学会）の責任だとは思いません。学会発表についても同じで、院生が発表したがっているのを上がつぶしているなどということはないと思います。

井上：口頭発表させるのと掲載論文の審査とは別問題でしょう。

前川：他の学会とか、他のところには、自分から発表したいと言いくいところがあるんじゃないですか？

司会：雰囲気的圧力によって自己規制がはたらくということですね。日本人の行動パターンの一つですね。若手の発表の機会が十分与えられている、あるいは与えられていないという二つの相反する意見も、その両方がそれぞれ事実を反映しているとなると、投稿してもらえなくて困っている学会側と投稿したくてもしにくく自分から動きが取れない人が大勢いる若手との日本の学術活動の難しい構図が見えてくる感じですね。

福田：あと、若手の発表を難しくしている問題の一つに、経済的問題もあるんじゃないでしょうか。日本の学会は基本的に会費制なので、複数の学会を掛け持つ

と負担も大きいです。また、地方から東京などの都市に出るのはかなりの交通費等がかかりますので、ましてや東北の人が九州の学会に出席するとなると、多大な出費を覚悟する必要があります。

井上：以前は、日本中国学会の大会は、一年おきに首都圏と地方で交互に開かれていたかと思います。しかし最近では毎年関東で開催されているので、田舎者には厳しかったですね。

福田：学生には出張手当が出ないので、学会に入会する段階で、一定の自主規制は働くと思います。台湾における学会の仕組みはどうでしょうか。

司会：中国哲学で言うと、台湾には「中国哲学会」と「台湾哲学会」の会費をとる会員制の学会がありまして、中国へのアイデンティティーの濃淡によって分かれているのですが、八割程度の会員は重複していると思います。日本と同じようにそれぞれ、年一回の総会があり、その時に論文を募集し、会の方で選別して発表してもらうことになりましたが、私が赴任して三年、「台湾哲学会」の方で中国哲学に関する報告は一つもありませんでした。もちろん、この分野の発表を排除したわけでは全然なく、そこで台湾の中国哲学研究者は台湾の中国哲学研究の未来に危機感を

持っているわけです。その一方で、我々の「楚簡研読会」がそうですが、一年一年、政府から補助をもらって運営する研究会のような活動が台湾では割と盛んで、こうした「研読会」がシンポジウムを開いたりします。会費はありません。

中国語による初めての論文執筆と修正

司会：それでは、第二部分に行きましょう。皆さん今回は始めて中国語で研究発表をされましたが、この会議の開催が決まり、論文を中国語に訳し（あるいは中国語で書き）、中国や台湾の人に直してもらい、発表の準備をして、そして発表までしたという状況ですが、それぞれのプロセスの中で、気づいたこと、更にぜひ若い人たちに知ってもらいたいことを話してください。それでは、段階を追って話していく事にしましょう。まず、皆さんは中国語で論文を準備する際、どのような困難に当たりましたか？

井上：台湾でネイティブチェックをしていただけという事にはなっていました。我々大阪組は、日本で一回ネイティブチェックを受けた上で原稿を台湾に送り（さらにチェックを受け）ました。

前川：まず中国語を直してくれる人探しですね。これが

かなり難儀しました。我々の場合は、周りに留学生の方が沢山いますので、直接の友達がいなくても知り合いの知り合いぐらいのツテでだいたい見つかるのですけど、他の大学なんかだとそうした人を見つけないこともあるのではないかと思ったりしましたね。

司会：例外はあるでしょうが、中国思想関係で国際交流をしようと思っっているような人はだいたい留学生の多い大学にいるか、あるいは留学生等の知り合いがいると思うので、学生レベルではむしろ人は探しやすいと思うのですが、むしろ、留学生がほとんどいないような地方の小さい大学に赴任している若手教員なんか、真剣に考えなければならぬ問題だと思います。もちろん、そのような環境で国際化が果たせる人は生き残り、そうでない人は淘汰されると言う状況になっていくのだと思いますが。では、中国語で論文を書くという作業について、皆さんどうでしたか？皆さん思案中なので、先に私の体験を若干述べさせていただきますようか。私は十五年前に台湾大学の修士課程に留学して、最初に授業のレポートを書くとき、日本語で書いてみたのですが、それをまた中国語に翻訳するのが面倒で、それならと

いうことで中国語で書き出してみて、それ以来一貫して、中国語のものは中国語で書いていますが、修士論文を書くころまで、私の書く中国語は、直してもらう台湾の院生たちから読んで意味が分からないとしきりに言われました。だから、中国語を直してもらおうと言っても、それ以前にまず直してくれる人に読んで意味の分からない部分を指摘してもらい、それをもう一度書き直すというのを何度もしました。皆さんは、直す人が分からないから書き直しをさせられたなどということはないですか？

上野：私の場合は日本語の原稿と中国語に訳したものを日本語の堪能な中国人留学生に直してもらったので、相手に分からないということはありませんでした。私の中国語原稿には分からないところがあつたのかも知れませんが、日本語の原文を読んで分かる人でしたので。

司会：日本語もちゃんとできる中国人の友人に直してもらうというのは私から見たら贅沢ですね。前川さんはどうでしたか？

前川：上野さんと同じです。

司会：福田さんは？

福田：私も日本語が分かる友人に添削してもらいました。

添削程度で修正可能な文章なら良いですが、往々にして添削者に意味が通じないということが起こります。そのような中国語レベルでは当然、口頭でも説明できないのですから、結局、日本語で説明するよりほかはありません。

司会：なるほど。

福田：直してもらおうと、このように言えば良いのかと感心するばかりで、修正後の文章を見ると、もう自分の論文ではないみたいない気がします。（一同笑）

井上：我々が中国語に訳した拙いもの（だけ）を中国人に見せても、おそらく内容を解ってくれない。

司会：これから中国語で発表するという最初の段階で書く中国語が中国人に理解してもらえないというのは、今回、最初に中国語で発表する目標を立てた人にとってポイントというか非常に高いハードルになりますね。私の場合は、台湾で、日本語の出来る台湾人を探すのは大変ですから、全く分からないと言われた箇所は、自分でじっくり考え直してみました。その上で、相手が分からない原因は、私の場合二つでした。一つは、使う用語や語彙が日本的で彼らにとって未知なものであったこと、そしてもう一つは、往々にして自分がそこで何を主張しようとしている

のかはつきりしていなかったということです。この二点が解決された場合、たいいていの場合だいたい相手に理解してもらえました。それに、やはり長い文章は短く切ってみるという努力もしました。

井上：複雑な箇所をぶつ切りにするのは、日本語で論文を書くときでも同じですよ。

司会：それでは、台湾の院生に送って直してもらった部分はどうか？かなり直されましたか？

井上：直してくれた人によって個人差があるのでしょうか。けど、細かな言い回しがだいぶ変えられていました。

司会：台湾とメインランドの間では、確かに違った言い回しはかなりあるという印象は、私が浅野先生の本を監訳（註：浅野裕一著、佐藤将之監訳『戦国楚簡研究』台北、万卷楼書店、二〇〇四年）した時にも確かにありました。直すという点で言うところ、むしろ中国文学出身の人は言い回しをいろいろ変えたがる癖があるというのが私の印象ですが。上野さんの文章を直したのは、中国文学系出身の朱さんなんですけど、あの日本語直訳的なタイトルを、そのままにしてちゃんと中国語らしいタイトルにしませんでした。内容の直しはどうでした。

上野：言い回しがかなり変えられていました。朱さんに

渡す前に直してくれた人は日本語が堪能なので、読んで分かるとそのまま直さなかったみたいです。

井上：私も上野さんと同じ人に（日本で）見てもらったのですが、その後台湾で、中国文学系出身の洪さんという人に直してもらって、言い回し中心で十箇所くらいでしたね。

司会：そうすると、やはり最初のワンステップが大変だということでしょうかね。そこである程度解決してしまえば、あとはかなり少ない訂正ですむということですね。台湾と中国の違いと言っても、台湾と中国の人はお互いそのまま論文をお互い読んで問題ないわけですし。

福田：私は、台湾大学哲学系博士課程（注：当時）の林明照さんに修正してもらいました。詳細に对照してないので、よく分かりませんが、私の意図とは違うように修正された箇所もあったように感じました。

司会：その可能性はかなりあります。ここで翻訳の指導をして感ずることですが、日本語をかなり勉強していても、実際翻訳させると結構、著者の意図と全く反対に翻訳したりする例はかなりあります。日本語の分からない人に直してもらったときにその人が文脈を見ないで、語法だけに注意して直している時この

ような問題がよく起こるようです。会議論文では、まだよいですが、投稿する時にはかなり注意深く自分の中国語の議論の意図の流れをチェックしなければなりません。

福田：それともう一つ気づいたのは、修正後の文章を見て、こうした言い回しでよいのか、それとも誤植なのか、自分では判断の付きかねる箇所が幾つかあった点です。

司会：それ自体は、時間さえあれば聞きなおせることだから、そんなに気にしなくても良いと思うのですが。佐野：そのようなやりとりも中国語でせねばならないのがまた問題なんです。

福田：日本語の分かる人だったら、日本語で確認することができそうですが、細かいところを中国語で林さんに説明できるようであれば、そもそも他人の手を煩わすまでもなく自分でやっている。ジレンマですね。

中国や台湾との電子ファイル送信に関する問題

井上：私は最終的に、（台湾側院生への）メールは英語で書いてました。そういえば、古いウィンドウズで打った繁体字（のメール）はよく化けましたね。

福田：中国語版ウィンドウズは、簡体字と繁体字の双方

の自動変換が可能です。私の場合、先ず簡体字で書き、その自動変換機能で繁体字に変換しましたが、細かいところに変換ミスが起きました。また私はチャイニーズライター（という中文処理ソフト）を使用しましたが、これで書いたファイルが中国で開けるかどうか不安がありました。実際、台湾に送ったファイルを林さんが開けないこともありましたが、司会：そうでしたね。その問題は私のパソコンを通すことで克服しました。

井上：操作者の予期しない書式修正を勝手にしてくれるMS Wordが一番怖いです。あと、最終的な割付は今回だと台湾でやってもらったわけですが、その最終的な版下稿をPDFなどにしてメールでこっちに送ることは出来ないか、そうすればこちらの責任で校正が出来るので便利だと思うのですが、著者による最終校正をしたいというとは思いました。あとWordですと、ウィンドウズの日本と台湾相互使用の状況では、フォントセットを相手側にインストールしないといけないという問題もあります。

司会：メールによる校正原稿の送付については、台湾内だと皆台湾版のXPを使っているから問題ないでしょうが、国外との校正稿のファイルのやり取りは、

注意しなければならない問題ですね。

上野：私も、台湾で印刷したら消えてしまった部分がありました。投稿の時にはこういうミスは起こってはいけないうけですから、そうした情報処理の知識も必要なのだと実感しました。

井上：ただ今回、紙のやりとりがなかったという点は意義深いとは思いますが。

司会：将来は、こうしたシンポジウムの計画段階で、こうしたファイルの互換性や校正稿のやり取りなど、最初にある程度、方法を定めておくというのが作業の効率を高めるために必要になるという点が指摘できると思います。

中国語での発表について

司会：では、発表についての感想をうかがいたいと思います。中国語での発表については、この会議の前にメールで皆さんにこうしたらよいあかししたらよいなど、いくつか私から述べたところがありますが、皆さん実際こなしてみてもう感じられましたか？それでは、発表の順でまた福田さんからお願います。

福田：当初、私は中国語で発表するつもりがなかったのですが、台湾到着後に急遽拼音調べを始めましたが、全

体を通してどれぐらい時間が必要かなど、十分な準備ができませんでした。読み上げるなら読み上げるで、もう少し周到な準備が必要だったと思います。ただ、今までこんなに長い中国語を読み上げたことはなかったので、後半部分で息切れがしました。最初はページ全体が見えていたのですが、次第に視野が狭くなり、最後は二文字程度視野の中で意識朦朧のまま読み上げているといった感じでした。また、開始や終わりのフレーズなどを考えるのも即興では大変困難な作業でした。

上野：事前にした準備は、省略するところの選定、また省略箇所をつなげるための言葉の準備。あとはひたすら読む練習ですね。私も福田さんと同じで二十五分中国語で読んだというのは始めてでした。最初は、長く読むのは面倒だと思うところがあって、練習に取り組むまでに時間がかかりました。

司会：通し読み一回あたりの練習に二十五分かかるわけですからね。

上野：はい。それでも、発表の日は近づいてくるわけですから、少しずつ練習しましたが、やり始めると、細かなところに凝りはじめて、レコーダーに録音して聞いてみました。なぜなら、自分で話すの

と聞くのとはだいぶ違うので。時間内で発表を終えるという点にも注意しました。聴衆の方は、論文を読みながら発表を聞いているわけですから、多少発音が違っていても、時間さえ守れば大丈夫だろうと思います。準備に関してはそれくらいです。発表そのものや質疑応答に関しては、もう、始まってみないとわからないですから。

福田：私など、最後はもう拼音だけを見ていたような状態です。よく分かります。

上野：自分は読むことで精一杯なので、はたから聞いていてどうなのかということが、レコーダーに録音していても自分では気づかないことがよくあります。ですから、私は一度中国人の友達に聞いてもらいました。聞いてもらうと、案の定勘違いしているところがあつたので、それを修正して、発表に臨みました。

司会：発表に関しては、その本人が持っているものとの実力がどうであれ、結果がよければいいと思うので、その意味で、お二方の発音は悪くなかった、少なくとも音声にしたことが意味として聴衆に伝わっただろうという点は問題ないと思います。その意味で予定の成果はきちつと達せられたと思います。問

題はアドリブの方ですね。例えば上野さんの場合、途中何回も「大家自己看」と言っていました。あれは命令ですからね。

上野：あー！すみません！（動揺）

司会：授業をやる時、先生が生徒に向かって「君たち自分で見なさい」というニュアンスですね。

上野：「請」を付けて読んでいたつもりなのですが、それならば問題はありませんか？

司会：そうです。最後のほうは「請」を付けてましたから若干よくなりましたけれども。最初は、三十から四十くらいの慣用句集を作ってしつかり頭にいったらよいと思います。例えば、「この点については資料を見てください」とか「ここは飛ばします」とかです。あと発表原稿を作る際、そうしたアドリブまで全て入った原稿を準備するというのも重要だと思います。それから、原稿の飛ばし読みについては、二十五分の発表で十ページほどの論文であれば、とりあえず、聴衆は発表者の報告を聞かなくても、自分で論文を全部読むことが出来ます。これは、考慮していることです。ただ、飛ばし読みの場合、引用句をあまり大きく飛ばす時にはその内容を要約するなど、議論の流れが聞いている人に明確となるよう注意

してください。そうでないと、聴衆が引用文にてこずっている間に、発表の方が進んでしまつて聴衆がついてこれなくなる可能性があります。

佐野：私は原稿の要点を読み上げた訳ですが、なるべく引用文も読むようにしました。長いものは途中を省略したり、引用文が複数連続するところは、一つだけ読んで「……等等」と言つてあとは省略したりしましたね。

福田：日本では、引用資料に通し番号が振つてあり、「ここは何番の資料を見てください」という勝手になつていて、引用資料を読まない発表も多々あります。それが良いかどうかは分かりませんが。

司会：自分の論述の流れが完全に出来ていて、ある資料がそれを証明するだけだったら、それでいいわけですね。聞いている人は一応資料を見なくても発表の流れにはついていけるわけです。だから、中国語でも同じように組み立てられればいいと思うんです。今回は二十五分でしたけれども、二十五分というのは例外的に長いです。普通はだいたい十五分くらいが最長だと思います。そうすると、アドリブまで含めた原稿を四〜五ページくらいで準備するという作業が必要になつてくると思います。それから、

報告内容のアウトラインをだいたい二、三行で準備しておいて、発表の最初にきちつと言うことは重要です。上野さんの場合もタイトルを言ったあと、すぐ論文の内容に入ってしまったね。聞いている人は「あ、あ、あ、」と心理的準備があまりないまま発表の内容に入ったと言う感じですよ。タイトル、主要内容、この論文を通じて論証したいことなどを論文内容に入る前に簡単に触れたいと思うんです。

前川：私は日本語で読みあげましたが、日本語の原稿はストップウォッチで計って十一分三十秒のものを用意していたので、中国語の通訳が入ってちょうど（二十五分）でした。私は読み原稿と論文は違うものを用意し、読み原稿は、冒頭の挨拶言葉から、「ご静聴どうもありがとうございます」まで入れました。外国語で発表するなら、なおのこと読み原稿をしっかり準備しないと不利だと思うんです。論文なら、書いてしまえば、さあ読んでくださいで終わるのですけれど、発表だと、母国語と違う言語でやるわけですから、外国人の場合は、数日前に予稿集片手に「ここは省略、ここはもう少し口頭で説明を」ということでは、ちよつと無理だと思います。

上野：同じ内容の発表でも、時間が母国語でやる倍くら

いかりますしね。

司会：そうですね。最初のうちは、しっかり準備しないとうまく発表出来ませんね。三、四回すれば慣れてきますが。ただ、今後は、最長十五分の短いところでの発表ということになりますから、四ページの原稿をしっかりと用意すればよいということと逆に楽になるということが言えると思います。早く読めばだいたい六ページくらいまで準備することは可能ですが、きちんとした発音でしっかり読み上げなければならぬので、あまり内容を詰め込んでしまうのは最初のうちには勧められません。

福田：読み原稿を別途用意するとき、最初のうちはそこにもネイティブチェックが必要となるでしょうね。

学会発表用の話し言葉となると、また別の難しさがあるように思います。

佐野：論文を読み上げる前にその発表の構成を解説した方がいいとお話でしたので、私は冒頭で発表の章立てを述べたのですが、論文の序などに「こういうことについて考察します」というような記述があった場合でも、やはり前に言わないといけないのですか？

司会：もちろん、序論にそういう必要なインフォメーシ

ョンが載っていて、その序論を読むことを決めていれば、それでよいと思います。ただ、福田さんの今回の発表の例で言う論文の序論は、出土竹簡の説明ですから、発表の構成の説明ではありませんね。ああいう場合だとやはり付け加えが必要だと思いません。

佐野：確か福田さんの発表の中でも、発表の構成や目的に言及した部分もあったように聞こえましたけれども。

福田：一応、序論の最後には全体構成に触れた部分があつて、いつもの発表ならその部分を強調して読み上げることもできたのですが、中国語となると読み上げに精一杯で、強弱をつける余裕などありませんでした。

司会：なぜ、私が「最初に」という点を強調するかという点、普通発表を聞く聴衆は、発表内容の専門家とは限らないし、ましては聞き取りにくい外国人のものなので、最初の全体のアウトラインを知りたいわけですね。それを聞くことによって、発表の具体的内容に入った時に自分の聞いている部分がその発表全体のどの部分なのか、把握できるわけですね。そのような手続きを踏むことによって、聴衆も、発表の

流れによりついて行きやすくなるということです。付言すると、台湾では、問題意識を最初に言うべきが多くて、私などもそれに時間をとられて論文そのものの内容を説明する時間があまりとれず、墓穴を掘るといことが時々あります。これを一分くらいでさつとこなせるのが理想ですね。安井君、笑っていますか、そういう経験ありましたか？

安井：論文の背景を言っている間に発表時間が終わってしまったことがあります。

司会：いろいろな感想が出たので、私の経験の範囲で、重要な点をあと四つばかり補充しておきましょう、第一は、アウトラインと関連しますが、なるべく自分の発表をパソコンのディレトリ構造のように項目の関係を明確に示して、聴衆が発表の構造の中のどこにいるのかが分かりやすいように示しておく。そうすれば、例えばある部分を省略しても、聴衆は「これは話の中のこの部分で、あとで読めばいいんだな」と自分で合点してくれる。第二には、前置きの中で必要なことですが、どのような形式で発表するかということ、例えば論文を読み上げるとい方式でやるとかいうことで、「今回は時間が限られているので重要な部分をかいつまんで読み上げる方式で発表を

進めます」とかです。今回上野さんの発表ではそれについてしっかり言及していました。第三には、自己紹介をどの程度入れるかです。外国で発表するときには原則としてほとんど自分を知らない人たちの前で発表するという前提ですが、そこでどの程度自己紹介をやるということも考えなければなりません。

問題意識の紹介もある意味で自己紹介の一つの方法だと思ふんですね。そこで勧められることは、もしそのセッションの司会の人がいたら、その人に自分についての簡単なインフォメーションを渡して、司会者に紹介してもらうことにより、自分の発表の時間を確保し、自己紹介の煩雑さを省略できるという方式です。今回では、福田さんの紹介をそのセッションの司会であった杜先生に頼んだというのは、そういう効果を考えてのことでした。最後の第四点は、フロアーから答えにくい質問が出た場合です。欧米や中国でよくあるのは、受けた質問に対し、「その質問は重要ですね」と答えて逃げるやりかたです。それもひとつの技術として覚えておいてよいと思いますが、やはり、質問に対してしっかりと議論をするということも必要でしょう。

福田：総じて、日本と台湾の発表方式の違いをつくづく

感じますね。中国語という問題もありますが、結局、我々の今回の発表は基本的に日本方式で、それを単に中国語で行っただけだったと思います。外国における発表がこんなにも違うとは、全く思いもしませんでしたね。

安井：台湾に留学している学生として、発表形式について気づいたことは、日本では原稿を読み上げるという形式が普通なのですが、台湾では普通そういう方式では発表しません。授業中の発表などでも、発表の内容以外に、発表の仕方というのを指導されることもあります。やはり観衆に退屈させない発表というのも大事なのだと思います。

井上：配布したレジュメを一字一句そのまま読み上げるのは、日本では、むしろ若手が最近はじめた傾向だと思えますが。

司会：いずれにせよ、その意味でもノウハウを事前にしっかりと知っておくというのは重要なんです。

日本と国外での学術活動の方式等の違い

司会：それでは、今回座談会の第三部分。以上のご経験をもとに、学術活動、特に発表の仕方等を中心に国外と日本との違いをクローズアップさせて見ましょ

うか。

井上：日本では、発表の最初に、これから発表する内容のアウトラインを示すということはほとんどないですね。

福田：日本では、今回の私の発表のように、アウトラインにあまり時間はかけず、発表を進めるにしたがつて次第にアウトラインが浮かび上がっていくというような、種明かし式の発表も多いように思われます。

司会：今までの話を聞いて、日本での発表の仕方の一つのパターンが浮かび上がってきましたね。こうしたことは逆に台湾の人たちに参考になりますね。

佐野：（国外では）結論は最初に言うのですか？

司会：そうしなければいけないというわけではもちろんありません。ただ外国での発表だと、時間が足りなくなったり、発表内容がコントロール出来なくなったりすることが予想されますので、そうした場合に備え、特に外国語で発表する場合は、結論を先に言うっておけば、万が一時間切れで終わったとしても、一応の目的を達せられたということになるわけです。重要なものから書いていくというのは、欧米で研究計画を提出する時などでは典型的にこの方式を採用します。審査員などは、一人が短時間で何十もの研

究計画を読まなくてはいけなわけですから、提出する方は初審では最初の一〜二ページしか読んでもらえないと考えた方がいい。総じて、言葉や、背景知識や前提の違う聴衆を相手に発表する場合には、発表そのものの高度な明確さが要求されるので、そういう意味からも、まずアウトライン、それから重要な点、論拠、関連資料等への指摘の順に明示的に組み立てて行く必要があるかと思います。

上野：アウトラインを三行くらいで示したらよいとの指摘があったのですが、それを項目化すれば効率よくなるのではないと思いました。

司会：そうですね。皆さんお気づきのように、私の基調発表の最初の部分はまさにそのようにしました。

国外に比べて学会における自由な討論が
あまりない日本の状況

司会：それでは、御自分の発表以外の面で何か気づいたことはありませんか？皆さんは三月二五日と二六日のシンポジウムにも参加され、その一部始終をご覧になっています。

前川：日本の学会に比べるとこちらでは発表後の討論がだいぶ活発ですね。日本での発表だと、発表はとも

かく、質問まで「仕込み」(前もってアレンジされていること)があります。だれも質問しないで、司会などが「だれだれ先生ですか」と質問を振って、その意見をもとに次は「だれだれ先生からこういう意見ができましたから、この方向で討論しましょう。」などということになるんですね。そして、そこで言われることは、最初にきちっとセットされていたりするんです。

司会：そういえば私が一昨年、早稲田大学で見学させてもらったCOE関係のシンポジウムで、発表者に質問があつたのに、司会の人が特定の先生ばかり指名して、ぜんぜん討論内容をフロアーに開放しなかつたんです。その結果、私は最後まで質問が出来ませんでした。シンポジウムと名の付く活動を行って外部の人をこんなと呼ぶのに、最初から討論をフロアーに開放しないのなら、シンポジウム自体の意味がないのではないかと私は正直げんに思いました。しかし、これはその時の会議だけではなく、かなり一般にそうだとということです。

福田：日本で開かれるシンポジウムの中には、討論と質問まで含めた大方の「マニユアル」みたいなものが既にできあがっているケースもあるようです。

司会：我々はここまで、個人が発表する上でそれに必要なマニユアルをどのように作っていけばよいかという話をしているのですが、日本では、全体の進行のやり取りをセットしたマニユアルを作るということです。個々の見解がぶつかりあうことを前提に考えられている日本以外の状況と比べるとかなり対照的ですね。そういった現象を表現する「仕込み」という言葉があるくらい日本的な現象なんですね。

井上：もともとは、発表の後に何にも質問がなかったら場がシラけるから、もしそうなった場合に出す形式的な質問をあらかじめ(身内で)用意しておく、というのが「仕込み」の本義だと思うのですがね。

福田：学会が大きくなれば大きくなるほど質問の頻度は減って、質問者は気の強そうな人か、その発表によく関係ある人たちなどに限られてくることも少なくないです。

井上：もしくは身内が「仕込み」で質問するとか。

司会：そうなってしまふと学術活動の儀礼化ですね。しかし日本で別の体験をしたこともあります。北海道大の中国哲学研究室で講演したときは、結構質問も受け、あまり閉鎖的な雰囲気など感じたりはしませんでした。

佐野：講演だと、「先生」に質問するという形なので、質

問はしやすいのだと思います。自分は非専門家だから、専門家に質問するのは恥ずかしいというスタンスですね。学会ですと、専門家同士の討論の場なので、専門家の土台まで上がって行つて質問するというのが、難しいことなのだと思います。発表者が間違っていることを発表の場で指摘するなんてことは日本の学会ではほとんどないですね。

福田：若手の発表にベテランの先生が激しい批判する、つまり発表者と質問者との間に上下差がはつきりしている時はそういうこともありえますが、逆に若手が著名な先生に矛盾を指摘するなどということは極めて少ないです。

井上：お互いに専門家同士の発表ですと、すごく初步的な質問をすると「恥ずかしい」となるし、的を射た質問をすると、今度は「上の人に切りかかる」ということになる。上の人から感謝されるということはあまりないと思います。学問的な間違いを指摘するのと人格攻撃との区別がつきにくい国ですから。発表の場では黙っていて、後から個人的に指摘するというのが美德とされているところもありますね。

司会：ここまで聞いて私が感じることは、やはり質問や

意見が出にくい雰囲気の中で発表することにどのくらい意義があるのかということですね。まず、発表者にとつて発表の意味というのは、発表した後、いろいろな質問や意見を受けてそれをもとに発表内容や論文の内容を改善していくところにあるわけです。発表者の内在的問題意識や論証にチャレンジするような質問や意見がなければ、それは発表者にとつてためにならない。あと、やはり発表者と質問者の間で見解が衝突した場合、両者は聴衆に対して自分の論拠が正しいと提示することを求められるわけで、発表者も質問者もこうした訓練を通じて、自分の学問的見識を高めていくということになると思います。日本で、その両方の訓練が出来にくい雰囲気があるというのは、国外から見るとかなり問題があると考えざるを得ません。そういう意味からも、日本の若手研究者は、国外の学術活動のなかで、問題を常に鋭く指摘してくる質問者と、自分と質問者に対するやり取りの中で、自分の回答の良否をジャッジしようとして聴衆を常に予想しながら、発表を積み重ねていかなければなりません。

福田：私が留学している北京の清華大学には、毎回著名

な学者を招待して講義する授業があり、講義後の質問タイムでは時間切れまで学生の質問が絶えません。

対照的に日本では、質問の際にいろいろな想いがよぎり、なかなかストリートに質問できないのではないでしょうか。日本では、面と向かつてはあまり質問せず、発表後に本人のいないところで様々な批評が飛び交うこともあります。そうした習慣も影響して、国外に出たときは、日本人だけが何も質問しないというような状況が生まれるのではないのでしょうか。

司会：その通りですね。実は先ほどもベルギーのデフォールト先生から、日本のゲストはもつといろいろな質問したり発言したりすればいいじゃないのと指摘されたところです。私は、彼らは、まだ語学的に質問を中国語でまとめたりするのが大変だからなどと言いつつ、い訳せざるを得ませんでした。

福田：これは、文化的な問題ともかわってきているので、国外に出たからといって、すぐに変えることのできない部分であり、もつとも厄介な問題なのかも知れません。

中華学術圏での博士号と博士論文を贈る意味

司会：積極性という意味から、博士号を持つ三名に今回特別に勧めたのが、博士論文を印刷してこちらの図書館や先生方に配るといふ交流です。自分を売り込むには名刺だけでは不十分で、自分の学問成果によって相手に自分を印象付けるといふ意味合いがあり、こういうことによつて国際会議によばれる機会も増えると思います。私の例のように、これがきっかけで論文が出版されたということもありますしね。

前川：ただ、日本ではそういう習慣はあまりないようですね……。

井上：私の世代ですと、在学中に博士論文を書くということはなく、大学院を出た十年以上後に、既発表の論文をまとめて学位申請するという形でしたので、博士論文を配るといふ問題自体はあまり発生しませんでした。が、現行の制度ではなるべく在学中に博士論文を書かせるということで、博士論文が量産されていきますから、こういう形で博士論文を配る機会もなく、流通もしていません。博士論文が外部の目に触れるということもありませんので、博士論文をもらつても（それがあまり公開されていないため）

引用することもできない、となるのです。

福田：日本でそういう習慣がないのは、恐らく日本では出版されていないものは正式な先行研究と見做さない慣習があるためだと思います。

井上：バンブーシルクとか、ネット上の論文も、日本では扱いにくいですね。

前川：ただ、慣例としてはともかく、制度上は本来（未出版の）博士論文を引用するのは問題ないんですね。

福田：そうですね。未出版の博士論文の扱い方については、これから先、何らかの対応が求められるようになると思います。

司会：これに関しては、ふたつの方面から考えられると思います。ひとつは、博士論文自体をあまり引用せず、商業出版を待つて引用する。これはどこも同じだと思いますが、それでもいい論文は出版前にすでに注目されているわけで、普段から国会図書館などの検索にかかるようにしておくことなどが大事だと思います。もうひとつは、博士論文に対する中国人独特の重視を理解する必要があると思います。人間関係の点から見ても、中華圏において博士論文を渡すというのは、相手にも非常に重視されることです。

ので、非常に意義ある行為だと思います。

発表に関してですが、国際的な中国学の場合において日本の若手が発表するというのは、厳しいけれども新天地であるということは言えると思います。日本の若手は、名前も知られていないし、習った先生なども（その場に）いないわけだから、敵も味方もありません。しかし、博士号を持っていないとなかなか一人前の研究者として見てくれないというような「敷居」があります。だから台湾では、院生は完全に子供扱いで、先生からは、発表なんかしないで、勉強をちゃんとして、一生懸命、学位論文を書けというような扱いを受けています。そして逆に博士をいったんとってしまうと、どんどん研究会に出て発表しないと淘汰されるという状況に直面します。ただ、台湾で業績として認められるのは論文発表だけで、口頭発表は評定時に一切カウントされません。

佐野：今回発表に際して、既発表のものの翻訳はだめということ、新しくネタを探ったわけですが、普段ですと、やはりまず日本語で書き、日本の学術誌に発表するというのを優先してしまうと思います。海外で発表するのは、同じ一つの論文を作成するのにも中国語訳する分だけ作業がふえる訳ですから。

井上：とくに出土資料関係のものなど、発表のスピード勝負という面もありますから、機動力のある、自分の（所属機関の）ジャーナルなどに出しがちです。で、いったん載せてしまえば、同じものを翻訳発表はできない。これを繰り返しておれば、いつまでたつても国際的な発表はできませんね。

司会：今回のシンポジウムのような形式であれば、既発表のものをもとに発表しても構わないのですが、論文投稿となると、翻訳でなく、オリジナルでないのだめということが多いのが事実です。ただ、これは技術上の問題になります。既発表論文の一部をさらに拡大して発表するというのは、大丈夫だと思います。

福田：メインランドの方では極めて短い論文や発表が多いですが、日本ではそのような短い論文は論文として認められない可能性もあるので、我々は日本の論文とのバランスにも気をつける必要があると思います。

司会：確かにメインランドの方では、同じ論文をいろいろな雑誌に投稿するということも多々あり、その点あまり敏感ではないようです。ただ、台湾の方ではこの点について非常に厳格で、台湾側からの要請と

なると、かなり厳しい審査を受けます。ですので、投稿するのであれば当然、未発表のものということになります。

今後への抱負

司会：それでは、座談会の最後の部分に移ります。皆さんの今回の経験を踏まえたこれからの抱負をそれぞれ聞かせてください。

上野：中国語を伸ばしていく、また海外で発表していく上でのモチベーションが、だいぶ上がったように思います。今回発表するということが決まってから、中国語の論文を読む時に、文型などを意識的にチェックしながら読んだり、こうしたフレーズや文型は使えるかなと思うと、メモを取ったりするようになりました。そうしたものをストックしていくことがこれからの課題だと思います。もちろん、そうしたものを実際使わなければ意味がないということも言えますが。

司会：前川さんは、今後の抱負をどう考えていますか？
前川：読み原稿ぐらいいは中国語で読むとか、その次にはディスカッションもできるようにするとか、段階的にやっていきたいと思いました。

あと、これは抱負とは違うのですが、フルに通訳を使ったのは私だけなので今回の経験で得たことを一つ。通訳を通すので、自分の話す時間が半分になつてしまう。これは明らかに不利な点です。しかし、通訳を通すとタイムラグがあるのでディスカッションの時は、僅かですが思考時間が延びるため有利になります。(中国語が) 出来ないといっても単語ぐらゐは聞き取れるわけで、相手の言っていることが全く分からないわけでもないですからね。こういう有利な点もあるわけだから、会話が少々苦手だとしても、怖れずにどんどん海外で発表していけばいいと思います。

司会：佐野さんはどうでしたか。

佐野：私も一番身にしみたのは中国語能力に関してでしたね。欧米の研究者もおられる中で、通訳を付けているのは我々だけだというのは、なんとも恥ずかしいものがありました。ただ、口頭発表はともかくとして、中国語で書けば海外でも読んでもらえるんだ、というのは実感できました。やはり中国語の共通言語は中国語な訳ですから。海外で認知して貰おうとするなら、中国語で論文を書かざるを得ない。我々も欧米の言葉で書かれた論文は敬遠しがちですから、

当然相手から見れば日本語も同様です。論文を中国語で発表するという選択肢は考慮してみるべきものでしょう。そのためには、中国語訳した論文を添削して貰える環境と、なにより己の作文力が必要ですね。結局、自分自身に関しては、会話力と作文力をつけなくちゃ、という反省に戻る訳ですが。

司会：井上さん、だいぶ苦勞していたようですが。

井上：私は、発表では読み原を(中国語で)棒読みし、質疑応答には通訳をお願いしました。しかし、學術用語の通訳は通常の通訳とは異なりますので、たとえば「クヨウガク」と口で言っても通訳の方に解りにくい。どうしても意志疎通に時間がかかり、充分な応答ができませんでした。特に今回、コメントテイターの先生から鋭い指摘を多数いただきましたので、充分な意見交換ができなかったことが残念ですね。私は今回の参加者の中で最も中国語ができない人間ですが、日本人(の研究者)はみんな(中国語の)読み書きだけならできるわけですから、あとは「耳を鍛えろ」ということですか。

それから、一般の参加者が多かったことに驚きました。日本でこのような会議を開催して学内外に周知しても、聞きに来るのはふつう関係者や専門家だ

けです。でも今回、一般の方や他学系の院生なんかが大ぜい来聴していた。これも風土の違いでしょうか。

司会：台湾の人にとっても中国思想は国学ですから、日本で邪馬台国のセミナーをやれば、郷土史家や中学、高校の先生が沢山参加するという状況を想像すればよいでしょう。では福田さん、最後に一言お願いします。

福田：中国語能力の向上は言うまでもありませんが、一口に中国語と言っても、会話調と論文調は全く別物で、辞書にも載っていませんから、日本の論文や発表で常用される言い回しを中国語だったらこのように表現するといった指南書のようなものがあればすごく便利だと思います。今回は青年学者を中心とした国際会議で、気分的にも非常に楽な面があり、色々な失敗はしましたが也非常によい経験になりました。私は残りの留学期間内でもうにか自分で発表できるレベルにまでもっていきたいと思っています。もしこちらで国際会議の機会があれば皆さんをお呼び致しますので、今回の反省を踏まえ、次回は是非満足のいく成果を上げて帰りましょう。

若手研究者による国際学術交流の「創造」の提唱 ― おわりに

司会：今回の発表に際して、皆さんは大変苦勞をされたわけですが、この活動の企画者としての私は、ここで改めて今こうしてこういう機会が実現している事実の意義を強調したいです。私は二日目の総括発言で、こうした青年会議を開くために、若手学者自身による「創造機会、掌握未来 (chuang zao ji hui, zhang wo wei lai)」という方向性を提示しました。つまり、こうした若手の活動を積極的に創出していくことにより未来への発展を掌握するという意味です。少なくとも皆さんがこうした活動を台湾でもつと行いたいとの希望を持っているのならば、私は惜しみなく協力します。しかし、ポイントは皆さん自身が主体となつて、活動を展開することです。

時間もすでに二時間をはるかに越えてしまったので、最後に、今日の座談会の内容を総括しましょう。上野さんのケースのように、自分で経験すると他の人の書いた論文の中で、自分が書くときにどうしたらよいかというマニユアル的知識に敏感になるという点は重要ですね。今まで人の論文を読んだ時は、

内容や論証、それに資料等の問題に目を向けていたと思うのですが、今後はそうした論文が、自分が発表していく上でのマニユアル的知識を提供してくれる宝庫になるわけです。その意味で、自分でまず中国語の発表を経験してみるということが重要なのです。私も振り返って見るとそうしたプロセスを十五年くらい繰り返して、だんだん自分なりの発表のスタイルを作ってきたと思うのですけれども、十年くらい経ってみて、周りを見てみるとこの分野の私の世代の中で私のように国際的に発表の場を参加しているような人がほとんどいないことに気づき、こういうノウハウをぜひマニユアル化して、日本の若手に提供しなければいけないと思うようになりました。それから、この時点で皆さんに勧めたいのは、今後皆さんの発展の過程で、福田さんのように一年でも二年でも海外滞在の経験を作ること。もちろん私は、むやみに海外に行っても成果があるとは限らないということは多くの経験者が指摘するところですが、やはり、出国前に留学において習得すべき目標をしっかりと設定できるかどうかが鍵になると思います。そういう意味で、今回のような体験を留学前に出来るということは、今後の留学の戦略が立

てやしくなると言う点で重要です。そうすることにやって私自身は十年かかったことでも、あとの人は、国際舞台で学術活動をするための基本的なノウハウを二、三年でマスターできる。そして、究極的にはそうした訓練のプロセスを中国思想研究の研究そのもののノウハウの訓練課程、つまり日本での大学院教育における制度の中に組み込んで行くといったことが要請されるのではないかと考えます。話しがちょっとずれるかもしれませんが、台湾ではいま教養課程（通識）と本学部の授業を分けて管理していて、教養課程の方は現在も拡大中で、例えば、教養課程の方で哲学を教えるとなると、あと四百人ぐらいの哲学博士が必要なのだそうです。そういう意味では台湾の中国哲学もまだまだ成長中だと言えます。つまり、皆さんも、少なくとも私のように台湾で中国哲学の教鞭を執るという可能性も現実選択肢として存在しているのです。今回のこの活動をきっかけにして、ぜひ先ほど触れたように、自分未来の発展と中国思想研究の未来の発展の両方を皆さんにはぜひ「掌握」して欲しいと思います。本日の座談会はこのへんで終了します。長い時間、活発な討論をしていただいてどうもありがとうございました。

一同：どうもありがとうございました。

付記：本座談会の討論者の一人である佐野大介氏がこの座談会の後、台湾の中南部にある明道管理学院応用日本語系に助教授として採用された。座談会最後の私の発言内容がこんなに早く実現し、企画者としてこの上ない喜びである。佐野氏の新たな国際舞台での活躍を心より祈る。

(二〇〇五年九月四日、司会者記す)